

# いまこそ「文法」「語法」を

田中 実

## 1. はじめに

2022年度からの高等学校での学習指導要領の改定に伴い、今回、新しく『チャート式シリーズ ビッグ・ディッパー高校英語』が発行されることになった。これまで以上に「話す・聞く・書く・読む」という4技能の育成が求められているので、それに対応できるような参考書に仕上げられている。さまざまな工夫が施されているが、そのいくつかを掲げておこう。

- ・連携している検定教科書 *BIG DIPPER English Logic and Expression I* で説明のない点を補足学習できるように準拠度を高めた。  
例) 教科書 p.18 / 本書 p.75

コラム will と be going to の違い

- ・教科書 p.42 / 本書 p.209  
have の使役と被害の違い
- ・特に話す活動と書く活動に有益な新たな差込みページとして Try to Express More 1～6 を設け、新指導要領に基づく学習内容を反映させた。
- ・QRコードから、基本例文・発音記号のページ・English in Real Situations の音声再生、音読スコア表示を可能にした。

ここで本書が発行されるまでの経緯を振り返ってみよう。1991年に『ラーナーズ高校英語』が発行され、1995年にその改訂版が発行された。2000年にはチャート式シリーズとなり、2017年に新訂七版が発行されるに至った。つまり、「ラーナーズ」の名は30余年にわたり受け継がれてきたのである。

## 2. 『チャート式シリーズ ビッグ・ディッパー高校英語』

こうした経緯を踏まえて、心機一転、新たな名での再デビューを果たすことになったのが「ビッグ・ディッパー」である。

「ラーナーズ」であれ、「ビッグ・ディッパー」であれ、その中身は英文法であることに違いはない。

英文法の習得の重要性については、*CHART NETWORK* 83号の拙稿「4技能の育成と文法」でも少し触れた。そこでは、故安藤真雄先生のお言葉を紹介した。すなわち、「英語力の基本は「読む」力ですね。そこから「書く」「話す」「聞く」力も養われてくるのですよ。それをバックアップするのが「文法」なのです」。

生徒にはこうした「文法」を『チャート式シリーズ ビッグ・ディッパー高校英語』を用いて、ぜひ習得してもらいたいが、教師の側でも「文法」を教える際の心構えとして「文法」「語法」の知識は欠かせない。では、その知識とはなにか。

## 3. 色彩形容詞+with+感情名詞

上記 *CHART NETWORK* でも触れたが、いわば規則づくめの学校文法とはやや性格を異にする、現に英語のネイティブスピーカーが使うありのままの英語を受け入れて、なぜそのように使うのかを問う記述文法、説明文法の域にまで立ち入った話とときどき生徒にする必要がある。それは「語法」に関する話、と言っていいかもしれない。そうすることによって、生徒は多かれ少なかれ「文法」「語法」に興味を持ってくれるかもしれない。

例を挙げるときりがないが、『ビッグ・ディッパー高校英語』でも look pale や turn red といった言い回しが出てくる。ここでは日本語表現にもある「恐怖で青ざめる」や「怒って真っ赤になる」といった表現に相当する英語表現を取り上げてみたい。

英語の場合、上のような表現は「色彩形容詞+with+感情名詞」で表される。「怒って真っ赤になる」といった表現から見よう。まず学習辞典を見ると、be [go, turn, burn] red with rage が紹介されている。

こうした記述は、学習文法のレベルではこれで十分である。しかし、もう一歩踏み込んで、記述文法、

説明文法のレベルに立って語法を見てみよう。例えば、コーパスの COCA で検索すると、感情名詞としては、次のようなものも使われていることがわかる(括弧内の数字はおよそのヒット数)。

red with rage(13) / embarrassment(12) / anger (11) / fury (10) / shame (7) / confusion, determination, glee, humiliation, indignation, irritation, joy, regret (各1)

学習文法では「red with」の場合、あとに続く「感情名詞」としては上記の辞典で示された rage でよいが、他にも anger, fury(ちなみに、fury > rage > anger の順で fury の「怒り」の度合いが最も強く、ときに狂気をも伴うことがある。拙著(田中 1992)参照)ぐらいを掲げておけばよい。だが、記述文法の観点からは「困惑」「恥ずかしさ」をそれぞれ表す embarrassment, shame もはずせない。

さらに、われわれは、いわばマイナスの感情だけではなくプラスの感情をも抱くので、ネイティブスピーカーのなかには red with glee, red with joy (BNC では red with pleasure もヒットする)といった表現も可能になる。つまり、説明文法の観点からは、人はマイナスイメージの感情だけではなく、ときにはプラスイメージの感情である「喜び」によっても「赤くなる」ことがある、と言えるのである。

また、例えば COCA では「絶望と怒り」「怒りと困惑」「失望と怒り」といった、いわば組み合わせの「感情」で「赤くなる」ことがあることも教えてくれる(red with despair and rage, red with fury and embarrassment, red with frustration and fury)。

#### 4. blue か pale か green か

ここで、「恐怖で青ざめる」といった表現にも触れておきたい。「寒さで青ざめる」という場合、確かに go [turn, grow] blue with cold のように blue は使えても、「恐怖で青ざめる」場合には go [turn, grow] pale with fear [fright] のように pale を用いなければならない。そして、pale であれば、pale with anger [fury, horror, etc.] のような感情名詞とともに使える。

しかし、COCA には blue with pride も見られるし、BNC には blue with rage も見られ、blue が使われないとは断言できない。

さらに、日本語表現でおなじみの、信号が「青に

なる」という場合、英語では通例、turn green のように green が用いられるが、green といえば、これもおなじみの green with envy(大変嫉妬した)が思い浮かべられる。その場合、感情名詞としては envy 以外にも jealousy, fear, fright, embarrassment なども可能である(ちなみに、jealousy はしばしば envy よりも不快な感情を指し、人を愚かな行動に駆り立てることがある(田中(監) 2011)参照)。次は BNC からの一例である。

The student flushed a deep green with embarrassment.

この例では、green with がひとひねりされて、a deep green with のように green が名詞として用いられており、変種の一つであると思われる。

#### 5. black より dark, そして white は

4章で envy と jealousy の違いについて少し触れたが、green with envy も green with jealousy も日本語では「大変嫉妬した」ことを表すことにはかならない。

こうした「大変嫉妬した」ことを表す表現形式には、コーパスには見られない文学作品における作家独自が用いる「色彩形容詞+with+jealousy」の例も存在する。例えば、D. Lessing は、“The Other Woman”で black with jealousy という表現を用いている。ここで、作家は green ではなく black を用いて当該箇所では彼の眼が「ひどい嫉妬の」眼つきであることを表しているのである。

しかしながら、こうした例は作家独自の言い回しであって、実際のところ、black+with+感情名詞 の用例をコーパスで検索しても、black with anger [fury, rage] などは少数見られるものの、やはり、black より dark を用いた例のほうが圧倒的に多い(dark with anger [fury, rage, fear, distress, sorrow, etc.])。

では、こうした black や dark とは対照的な色彩の white の場合はどうか。

G5, W4, 安藤(編)(2011)では white と関わる感情名詞として agony, fear, rage, terror といった語が掲げられている。他方、COCA で多いもの順では fear, anger, fury, rage と並び、以下、dread, excitement, outrage, apprehension, contempt, terror も見られる。ちなみに BNC で

は anger, fear, rage, fury の順に並び、以下, anguish, anxiety, distress, terror なども見られる。次は複数の感情 rage and dismay が出現する COCA からの例である。

Two or three young men, their faces white with rage and dismay, began looking for him. こうした多様な「感情」で人は white になるが、上述のように文学作品では作家自身の創造力が発揮されたユニークな例も見られる。

His face was white with ecstasy. (D.H. Lawrence, "The Ladybird") (下線部筆者)  
上の文学作品にみられる ecstasy で人が white になるとは、日本人の発想ではなかなか浮かびにくい表現であると言えよう。

## 6. purple はどんな色？

3章では red を取り上げたが、red と同系色の purple は「red と blue の中間色で、violet より濃い紫色を指し、日本語の「紫色」よりも赤に近い色を指すことが多い」(G5)とされ、また、W4 では purple は「violet よりも濃い、赤みがかかった紫をさすことが多い」とされている。そのうえで、G5, W4 の例を見てみると、次のようになっている。

turn [go] purple 「with rage [in the face] 怒って [顔が] 真っ赤に変わる [なる] (G5)

turn purple with rage [cold] 怒りで顔が赤くなる [寒さで肌が紫色になる] (W4)

さらに、安藤を見ておくと、次のようにある。

go purple (in the face) ((口))(怒って)赤黒い顔になる◆ He went purple with anger. 彼は怒って赤黒い顔になった

以上のことを踏まえてコーパス検索を行ってみると、コーパスでは purple with rage が数は少ないものの一般的であることから、感情名詞としては anger よりも rage が適切であり、purple については、日本語で「真っ赤」や「赤」ではなく、安藤流に「赤黒い」とするのが適切であると思われる。

## 7. 結局、人は「怒り」でなに「色」に染まるのか

3～6章で多かれ少なかれ見られる anger という「怒り」を表す感情名詞は、red, pale, black, dark, white, (purple)と結びつくことがわかったが、これら以外の「色」と結びつくことは不可能な

のであろうか。

BNC を検索してみると、次のような例がある。

She could see the landlady peering from the doorway of the writer's room, pink with anger. (怒って顔を赤らめた宿の女主がその作家の部屋の戸口からのぞいているのが彼女にはわかった)つまり、この例では anger で pink に染まっていることが表されている。もちろん、pink に染まるのは anger 以外でも可能である。

pink with pleasure/excitement/embarassment/gratification / indignation (BNC)

pink with embarassment/pleasure/excitement/rage / shame / relief and gratitude (COCA)

## 8. おわりに

以上、英語学習における4技能の育成には文法力が不可欠であり、その力を伸ばすのに『チャート式シリーズ ビッグ・ディッパー 高校英語』を役立てていただければ幸いであることを述べた。そのうえで、文法を楽しく学ばせるには学校文法レベルに出てくる表現の場合、教育現場では実際のところ難しいかもしれないが、記述文法、説明文法レベルにも立った「語法」に関わる話題を提供していただければ、程度の差こそあれ生徒は興味を持って聞いてくれるのではないかという希望的観測を色彩表現の例をまじえながら述べた次第である。

## 参考文献

田中実(1992). 『英語シノニム比較辞典』. 研究社出版.

田中実監修(2011). 『小学館オックスフォード英語類語辞典』. 小学館.

安藤貞雄編(2011). 『三省堂 英語イディオム・句動詞大辞典』. 三省堂.

南出康世 編集主幹(2014). 『ジーニアス英和辞典』(第5版). 大修館書店.

井上永幸, 赤野一郎編(2019). 『ウィズダム英和辞典』(第4版). 三省堂.

BNC (British National Corpus)

(URL: <https://www.english-corpora.org/bnc/>)

COCA (Corpus of Contemporary American English) (URL: <http://corpus.byu.edu/coca/>)

(元関西学院大学 教授)